

では今晚2月の夜7時からのお礼拝、主題は「なまぬるいクリスチャンについて」ですが、なまぬるいクリスチャンについて語るとともに、熱いクリスチャンについても語りしたいと思います。皆さんの週報に**黙示録3章16節**を冒頭に掲げております。**3章16節**と聞いたら真っ先に**ヨハネの福音書の3章16節**を多くの人は思いつくと思います。或いは**第一ヨハネの3章16節**。**第一ヨハネ3:16**も**ヨハネの福音書3:16**と内容的には似通っています。まさに神の愛について、神がどれほど私たちを愛しておられるのか。その愛は口先だけのものではなくて、行動に現わされたもの、これ以上ない至上の愛として私たちにハッキリと示されているものであります。神が最も大切なひとり子を私たちに与え下さった。御自分の命以上の存在が御子であります。親であれば分かると思います。特にひとり子ということであれば、自分の命よりも大切なものであります。自分の命を差し出した方がもっと楽だったはずですが、でも楽な方を父なる神は選びませんでした。これ以上ない愛を示すために、最高の愛を示すために、何一つ出し惜しみしないで、差し控えることをせず、すべてを注ぎ尽くす愛。これは一番大事なものを犠牲にする愛であります。それがまさに御子イエス・キリストの命であったわけです。素晴らしい神の愛が語られているその2つの**3章16節**。それとは別に同じヨハネが書いた**ヨハネの黙示録3:16**には同じようなことが書かれているように期待したいですけれども、でもそれとはむしろ真逆のことが書いてあります。そこには『**このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。**』愛して、赦して、受け入れるとは真逆に、「吐き出そう。」この“吐き出す”というのは、まさに嫌悪感をもって、「もうこんなものはとても口にできない。とても飲み込めない。もう口の中に入れてられない。気持ち悪くて仕方がない。」忌み嫌って、吐き出して、拒絶するという、非常に激しい強烈な言葉が使われております。これを主イエス・キリストご自身が語っておられます。私たちの愛する方がこれほどまでに嫌っているもの、それが“なまぬるいクリスチャン”であります。あなたはなまぬるいクリスチャンかどうか、今から皆さんのお手元にある週報を用いながらお伝えしたいと思います。そこに書かれている内容は、世界的にも有名なアメリカの牧師のフランシス・チャンという人が書いた『**クレイジーラブ**』という本があります。そこから抜粋したものであります。これにインスパイアされて、刺激されて、啓発されて、今晚の説教を是非とも皆さんにお分かちしたいと思いました。その本は邦訳されていて、皆さんも見たことがあるかもしれません。もう読んだことがあるという人もあるかと思いますが、ベストセラーになっていますので、英語の本としても全世界の人に読まれているという内容であります。

そして、その中に“なまぬるいクリスチャン”についての定義のようなものがずっと並べられております。そこを目で追いながら進めて行きたいと思います。私たちがイメージする“なまぬるいクリスチャン”、それとまたこのフランシス・チャンという人が定義してくれている“なまぬるいクリスチャン”についてここで考えながら、そして自分はどうなのかということをお問自答しながらまずその引用を聞いて頂きたいと思います。

『**信仰のなまぬるい人は、教会にまあまあ定期的に参加します。周りの人々からそれを期待されており、“良いクリスチャン”はそうあるべきだと信じているから、そうするのです(イザヤ29:13参照)。』**

括弧の中に(イザヤ 29:13 参照)とありますから、これはこの時間に開いて読むことは致しませんので、是非また家に帰ってそこを開いて読んでみて下さい。同じような信仰のなまぬるいクリスチャンについての定義があと続きますが終わりのところに括弧があって、そこに参照箇所がその都度その都度挙げられていますから、それを今の時間内にすべて読むことは出来ませんので、皆さんの課題としたいと思います。

次に『**信仰のなまぬるい人は、チャリティーや教会に献金をささげます。自分の生活水準に影響をきたさない限りは。生活に支障のないわずかお金なら、ささげることも簡単で、心配もいらないのでそうするのです。どうせ神は、喜んでささげる人を愛してくれるのでしょうか？(1歴代誌21:24;ルカ21:1-4参照)』**

『**信仰のなまぬるい人は、対立が起こったときは、正しいことよりも評判のいい方を選びます。教会の中でも、教会**

の外でも、両方にうまくとけ込もうとします。神が自分の心や生活をどう思うかよりも、周りの人が自分の行動(教会出席や献金額)をどう思うかが気になります(ルカ6:26;黙示録3:1;マタイ23:5-7参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、本当に罪から救われたいと思っているわけではなく、罪による罰から免れたいだけなのです。罪を心から憎んでいるわけではなく、神の裁きが怖いので、申し訳なく思っているだけです。信仰のなまぬるい人は、罪に生きていた過去よりも、イエスの与えてくださる新しい人生のほうが優れているとは、本当には信じていないのです(ヨハネ10:10;ローマ6:1-2参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、キリストのために極端なことをした人の証しを聞いて感動しますが、自分は実行に移しません。そのような極端な行動はごく一部の“大胆な”クリスチャンがすることであり、普通のクリスチャンがすることではないと思っています。信仰のなまぬるい人は、イエスがすべてのクリスチャンに望んでいることを“極端”と見なすのです(ヤコブ1:22;ヤコブ4:17;マタイ21:28-31参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、自分の信仰について近所の人や同僚、友人にめったに話しません。拒絶されたり、宗教など個人的なことを話し、周りの人に不快感を与えたりしたくないのです(マタイ10:32-33参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、自分の道徳観や“善行”をこの世と比べます。敬虔なだれそれより熱心にイエスを信じていなくても、近所に住む感じの悪い人よりはマシだと、そのままの自分に満足しています(ルカ18:11-12参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、イエスを愛していると言いますし、たしかに人生の一部はささげます。しかし一部だけです。時間、お金、思いの一部はささげますが、自分の人生をコントロールされたくはないのです(ルカ9:57-62参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、神を愛していますが、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、熱心に愛することはしません。もっと神を愛したいけれど並の人には不可能だ、と言います。そのような愛し方は、牧師、宣教師、敬虔なクリスチャンにしかできないと言うのです(マタイ22:37-38参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、他人を愛しますが、自分を愛するほどには愛しません。愛する相手も、家族や友人、心の通じ合う人など、自分を愛してくれる人たちだけです。自分に愛を示してくれない人への愛はほとんどなく、自分を侮辱する人や、わが子より運動神経のいい子どもを持つ人、会話するのが厄介な人、気が合わない人に対する愛はなおさらありません。そのような愛は、条件付きの愛であり、えこひいきの愛、見返りを求める愛です(マタイ5:43-47;ルカ14:12-14参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、神や人に仕えますが、どれだけの時間、お金、エネルギーを費やすかということには制限があります(ルカ18:21-25参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、御国での永遠のいのちよりもこの世の人生のことを考えます。“今日のやるべきこと”や週間スケジュール、来月の旅行計画、といったものを。天での生活について熱心に考えることはごく稀です。C・S・ルイスはこう書いています。「歴史を読めば分かることだが、現世のために最も多く働いたクリスチャンたちは、来世について最も多く思いをいたした人たちであった。・・・クリスチャンたちの現世における働きがかくも非力になってきたのは、彼らが来世のことをあまり考えなくなって以来のことである」(ピリピ3:18-20;コロサイ3:2参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、豊かさや快適さを感謝しますが、貧しい人を可能な限り援助しようとはほとんど考えません。「イエスが金銭ではなく、金銭を愛することが悪の原因だと言っただけだ」とすぐ言い出します。裕福な人への伝道に“召されている”と感じている信仰のなまぬるい人は大勢いますが、貧しい人への伝道に“召されている”と感じている人はごくわずかです(マタイ25:34, 40;イザヤ58:6-7参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、大きすぎる罪悪感から逃れるためには何でもします。最低限のことだけで、あまり多くを求められずに、“十分良い”とされたいのです。「どうしたら、聖霊の宿る宮として、自分を聖く保つことができるだろうか?」ではなく、「どこまでなら、罪と見なされないだろうか?」と問います。「どれくらいささげられるだろうか?」ではなく、「どれくらいささげればいいのか?」と問います。「会社に行かずに、もっと聖書を読んでいられたら!」では

なく、「どのくらい祈ったり、聖書を読んだりすべきなのだろうか？」と問います(1歴代誌29:14;マタイ13:44-46参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、いつも安定を気にかけ、コントロールすることに執着しています。神のために犠牲を払ったり、リスクを負うことは避け、安定した生活を保とうとすることです(1テモテ6:17-18;マタイ10:28参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、教会に通い、十二歳で信仰告白をし、洗礼を受け、クリスチャンホームに育ち、共和党に投票し、アメリカに住んでいることで安心していきます。(典型的な白人の福音派のクリスチャンのことを言っています。)旧約聖書の預言者たちが民に忠告し、ここがイスラエルだからと無事なわけではないと告げたように、クリスチャンだからと無事だというわけではないので(マタイ7:21;アモス6:1参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、信仰によって歩みません。信仰に頼らなくても良いような生活をしているのです。予期しないことが起きても、神に頼る必要はありません。貯金があります。神の助けは必要ありません。退職後の年金が積み立ててあります。神が用意している人生がどのようなものか、真剣に求めることはありません。すでに自分の人生計画があります。日々の生活で神に頼ることはありません。冷蔵庫の中はいっぱいですし、大抵の場合は健康です。実際のところ、突然、神を信じるのをやめたとしても、あまり生活は変わらないでしょう(ルカ12:16-21;ヘブル11章参照)。』

『信仰のなまぬるい人は、そこまで酒を飲み、罵ったりはしないでしょう。しかし、それ以外は、神を信じていない人たちとほとんど変わらない生活をしています。一部の悪を排除する生活を“聖さ”と勘違いしていますが、これほどの間違いはありません(マタイ23:25-28参照)。』

これらがフランシス・チャンによる“信仰のなまぬるい人たちの姿”です。定義であると言っていいと思います。そしてこれを自分に当てはめたらどうなのかということを考えて頂きたいと思います。第二コリント 13:5 に『信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。』今晚これを皆さんにお願いしたいと思います。『信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。』と。その後の引用文も是非読んで頂きたいと思います。

午前中に Y 君が来ましたが、先にこの週報を読んで「全部これは自分に当てはまります。」と。「なまぬるいクリスチャンで全部自分のことを言い当てています。だから今晚は遠慮します。」と言って帰りましたが、勿論他に用事があったから帰ったのですが、でも彼に限らず恐らく皆さんもこれらの定義はほとんど自分に当てはまる。これはまさに自分のことではないかと。私はなまぬるいクリスチャンだ。開き直って「どうせそうだよ。」という人もあるかもしれません。でも、もう一度黙示録 3:16 の言葉に目を留めて下さい。『このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。』イエスがこれほどまでの強烈な言葉をもって「私は大嫌いだ。」と言っているのです。口に入れたくもない。とても耐えられない。言い方を変えたら「あなたの存在に耐えられない。気持ち悪い。嫌だ。」強烈な言葉です。イエスがこれほどまでに嫌っているなまぬるさを私たちは平気で受け入れます。「どうせ私はなまぬるいクリスチャンですよ。それがどうしたんですか。別にいいです、このままで。」熱くもなく冷たくもない。本当にそれでいいのでしょうか。イエスはこのなまぬるさを他の何よりも忌み嫌っているということです。でも私たちは、イエスとはあまりにも温度差があります。それで平気でいられます。イエスがそうおっしゃっているのに、「そのくらいは勘弁してよ。人間なんだから。私は弱いんです。だって神様はありのままの私を愛して受け入れてくださるのでしょ。いいじゃないですか、このままで。」それをなまぬるいと言うわけです。暑くも冷たくもない。聖書は白黒ハッキリしています。光か、闇か。真理か、偽りか。従うか、従わないか。信じるか、信じないか。その中間はありません。天国か、地獄か。永遠の命か、永遠の滅びか。中間はありません。その中間のグレーな状態、中途半端な状態、どっちつかずの状態。それがなまぬるいと言われ、それをイエス・キリストは殊更に嫌っているということです。私たちの主がこれほど嫌っていることを、私たちは厳粛に受け止めなければいけませんし、私たちの愛する方が、私たちの花婿が、夫がこんなに嫌いだと言っているのに、花嫁の私たちは平気のへっちゃらと。「私はどうせなまぬるい花嫁ですよ。それがどうしたんですか。」本当にそのように主の前で開き直れるのでしょうか。そのことを今晚こ

ここに集まっている皆さんにも是非考えて頂きたいと思います。少なくとも今晚、この「なまぬるいクリスチャン」というのが主題となっているということを知った上で皆さん集まっているわけですから、結構熱い方だと思っています。でも中にはなまぬるい人もあらうと思います。これを聞いても「ああそうですか。分かりました。さようなら、また来週。」結局何もせずに現状のままで済ませてしまう。今の自分に満足してしまう。何も変える必要もないし、変えたくもない。現状維持でいいです。成長もなければ後退もない。「毎週毎週欠かさず教会には来ているわけですし、何の問題もないはずです。献金だってしていますよ。奉仕だって必要ならばやっています。それでいいじゃないですか。それを1年、2年、5年、10年、ずっと変わらず続けてきた。それだけです。それでいいじゃないですか。」でも主は、その状態をなまぬるいと呼ばれ、忌み嫌われているということです。是非今晚を機にこのなまぬるいクリスチャンを脱して頂きたいというのが、牧師としての私からの願いであり、叫びであります。そして勿論その中に自分も含めて語っています。私は今以上に熱いクリスチャンでなければならない。牧師である前に、熱いクリスチャンでなければならないと、自分にも言い聞かせながら、これからの時間をお分かちしたいと思っています。ですから皆さんをただ断罪して「お前たちはなまぬるいクリスチャンだから、今すぐ悔い改めよ。」と上からものを言って、皆さんをしばこうと思っているわけではありません。私も皆さんと同じものです。今読んだ**信仰のなまぬるい人**たちの定義は自分に当てはまると、そう思ってこれは皆さんにも是非分かち合いたいし、共に熱くなりたい。同じ教会に集められているから、自分だけ熱くなればそれで良いというふうには思えなかったのです。皆さんと一緒にもっと情熱的に、もっと熱心に、もっと主に喜ばれるような、主を熱く愛するそういうクリスチャンと一緒になりたいとそう思って、この時間を主から頂いたとそう思うに思っこのテーマをお届けしております。

実はこの2月5日は**“笑顔の日”**と言います。どうしてかと言うと2と5で“にこ”。ですからこの**“笑顔の日”**はこの2と5の語呂合わせで「いつもニコニコして笑顔でいるようにしましょう。」と。先ほどここに来る前にコンビニでMさんに会ったのです。そうしたらMさんが帰り際に「最近調子が大分良くなってきたので教会には是非行きたい。」とおっしゃって、最後に「私もカズさんとユキコさんに倣ってニコニコするようにします。」Mさんにそう言われて、「あなたはもっとニコニコするように。」と。だから私ももっとニコニコするようにと、2月5日だったということを思い出して、主が粹なことをされたなと思ったんですが。ただ今晚のテーマはとでもニコニコしながら話すことが出来ないテーマであります。

でも2月5日は実はあまり多くの人は知らないかもしれませんが、熱いクリスチャンたちの記念日であります。2月5日は『**長崎 26 聖人殉教の日**』と呼ばれているのです。聞いたことがあるでしょうか。長崎に行かれたことがあれば、きっとこの長崎 26 聖人の石碑とか、或いは博物館を見たことがあるかと思います。知らない方のために、この長崎 26 聖人殉教の日がどうしてこの日で、何の記念なのかということをお分かちしたいと思います。彼らこそ熱いクリスチャンと、私は彼らから大いに刺激を受けております。時は1597年2月5日水曜日です。豊臣秀吉の命令で外国人宣教師6名、日本人修道士3名、信徒17名がキリシタンという理由で長崎で十字架刑にされた、磔刑された史実に基づく記念日であります。日本でキリスト教の信仰を理由に最高権力者の命令によって処刑が行われたのは、これが初めてのことだったということです。この出来事を『**26 聖人の大殉教**』とも呼んだりいたします。この26人は後にカトリック教会によって聖人の列に加えられて、“日本 26 聖人”と後に呼ばれるようになりました。いま遠藤周作の小説『沈黙』に基づいた映画『沈黙』、長野でも映画館で上映されていると思いますが、それは結構話題となってクリスチャンの界限でもいろいろとその映画の感想なども交わされたりしているのをSNS等でも皆さんも御覧になっているかと思います。その時代と重なるところがあるんですが、この1597年の前に1545年から1563年にかけてローマ・カトリックでトリエント公会議という教会の公の会議を開きました。その会議はどうして開かれたかと言いますと、その前にカトリックの修道士だったマルティン・ルターという人がとんでもない発言をして、とんでもない主張をして、「カトリックの教理が間違っている。ローマ教皇などというものは認められるべきものではない。教会の頭はローマ教皇ではなくてイエス・キリストである。贖宥状なるもので(昔は免罪符と呼んだもので)それによって煉獄の苦しみ・痛みが軽減される、金で免償されるなんていうことは、聖書のどこにも書いてないし、そもそも煉獄なんていうものはおかしい。人の救いというものが行いによって得られるなんていうのはおかしい。」彼は聖書を読んで、聖書に忠実

であろうとしたわけです。それがプロテスタントという抵抗を意味する言葉となって大きなうねりとなっていくんですが、そのプロテスタントの動きを押さえ込むために、あるいは取り込むためにこのトリエント公会議というのがカトリック側で開かれたわけです。ルターの主張した聖書のみ。それは 66 巻のみということです。カトリックは 66 巻以外にも第二正典と呼ばれる、私たちプロテスタントが『外典』と呼ぶものを聖書として見なしています。ですからカトリックの使っている聖書は、私たちの使っている聖書とは違うんです。66 巻だけではないのです。プラスアルファあるわけです。ルターはそれを正典と見なさずに排除したんです。66 巻だけが正典だと。でも、このトリエント公会議では「否、それは間違いだ。」と。敢えてルターの主張を否定して、そしてカトリックはその外典を含めた聖書プラス『聖伝』という言い伝えを、カトリックの昔からの伝承を、これを聖書と同等の権威のものだと改めてそこで確認して、「ルターが言う“聖書のみ”というのは間違っている。聖書は外典もプラスして、しかも聖伝と呼ばれる聖なる伝承も聖書と同等の権威があるものとしてプラスして、それによってカトリックの教理の拠り所とする。」という宣言を、この公会議でしたわけです。

また他にも救いは行いによるということで、7 つの秘跡。例えばミサに参列するとか、或いは幼児洗礼を受けるとか、カトリック信者同士で結婚するとか、あるいは司祭に赦しを乞うて（懺悔するということです。）それによって罪の赦しを得られるとか、そういう行い、行為。それが 7 つあるということで 7 つの秘跡。これをこのトリエント公会議で改めて確認して、ルターが言った『信仰によって救われる』とか、『神の恵みだけで救われる』なんていうのは、これはおかしいと。神の恵みはあるけれども、でも人間が行なわなければ人は救われないんだと。敢えてルターの主張を否定したのであります。

そしてカトリックの人は信仰だけでは救われませんから、行いを、善行を積んで救いを得るんですが、それが不十分なわけです。そして不十分な人は死んだら天国へはストレートに行けないと教えるわけです。天国に行かないということはどうなるのか、地獄に行くんですか？ 否そうではありません。カトリック信者であれば地獄には行きません。ただ煉獄というところに行くわけです。でも煉獄というところは、地獄と同じほど苦しいところです。そこに行って自分の生前の罪の償いをするわけです。ですから生前沢山の罪を犯してしまったら、その分長く苦しみをそこで受けながら、そして自分の罪の償いをするわけです。罪滅ぼしをするわけです。それがあまりにも苦しいので、死ぬ前に贖宥状なるものを買って、お金でその苦しみを軽減しようと。それが中世カトリックで行われたことで、ルターが我慢ならなかったところです。

そういう時代に実は宣教師たちが日本にやって来たわけです。彼らはプロテスタントではありません。カトリックです。彼らが日本に持ってきた信仰は、まさにそのような信仰だったのです。「イエス・キリストを信じるだけでは救われない。行いが必要である。」天国に行けるなんていう人はそうそういないわけです。罪をまったく犯したことの無いようなパーフェクトな人でなければ、天国には行けない。そして天国に行けなければ、死んだら怖いわけです。煉獄に行ったらどれだけ苦しまなければいけないだろうか。プロテスタントの葬式とは違ってカトリックの葬儀は実に暗いです。誰 1 人として天国に行くと大喜びして主をほめたたえる人はいません。「冥福を祈りましょう。少しでも苦しみが消されるように。減らされるように。今残っている私たちがこの死者のために一生懸命祈って、一生懸命良い行いをして、一生懸命お金を捧げて、それで少しでも故人の煉獄での苦しみが減るように。」死者のためにも働くわけです。自分のためにも、死んだ人のためにも冥福を祈って、良い行いを積んで。それではまるで別の宗教ではないですか？ それをキリスト教とはとても呼べないじゃないですかと、皆さんはそう思うと思います。でもカトリックにおいては、それが普通なんです。ですから仏教と同じように、死者のために冥福を祈るわけです。天国に行ったという確信がないので、とにかく死ぬということは本当に重苦しいことで、場合によっては死ぬ前に何か大きな罪を犯したら地獄に行っているかもしれない。そんな恐れも抱きながら、とにかく冥福を祈るわけです。そして冥福を祈る際には、マリア様に祈るのが一番良いと、カトリックでは教えます。神ではなくてマリアに祈るのです。それも勿論ルターが否定したところです。でもカトリックは、マリア、若しくはカトリックが認定している聖人たちに祈ることによって、より効果的な祈りを捧げることが出来て、神様はその聖人たちのとりなしをちゃんと聞き届けて下さると。カトリックの人は自分で

祈ることは出来ないのです。直接イエス・キリストにお願いすることは出来ないのです。必ず誰かを介して、一番最高に理想的なのはマリアを通して祈ることが一番神様に聞かれる。なぜならばマリアは神の母であるから。母親の言うことなら、息子のイエスもよく聞くはずだから。そういう信仰が日本に伝えられたということです。ですから『沈黙』に出てくる殉教者たちがどういう信仰を聞いて、どういう信仰を持っていたのか、考えなくてはなりません。プロテスタントの人はその辺がよく分かっていないので、私たちと同じような信仰を伝えられたと思い込んで、そして彼らが迫害を受けて殉教した者もあれば、また転んでしまった者(背教した者、棄教した者)もあって、それが遠藤周作の『沈黙』の中にも描かれております。でも殉教しても、それは行いによって救いを得られるための殉教である可能性もあるわけです。また背教したとしても、後で良い行いを積みばその罪も償われる。煉獄に行くかもしれないけれども、地獄に行かずに済む。だから別に今イエス・キリストを否定したところで、今信仰を公の場で捨てたところで、別に後で埋め合わせは出来る。そう思って、転ぶことも出来るわけです。それがカトリックの正式な公式な信仰であるからです。

そう考えると見方が大分変わると思います。でも、今私はその話をしたいのではありません。それはもう金曜日の夜のバイブルスタディーで散々話してきていることですから、それを踏まえて今からこの長崎の 26 聖人の話をしたいと思います。結論から言いますと彼らの信仰というのは、極々私たちの信仰に近いものだったということです。いわゆる聖書から逸脱したカトリックの行為義認の信仰というよりも、文字通り目に見えるタイルを使って偶像化して偶像礼拝を捧げるような誤った礼拝の仕方ではなくて、本当に目に見えない方を自分の最も大切なお方として慕わしい方として、その方を見るようにして彼らは喜びのうちに神の栄光を自分の死をもってしても表して、そして殉教していったということなんです。

26 聖人というのは簡単にどういう人たちか御紹介したいと思います、ちょうど記念碑にその 26 人がずっと並べられているんですが、右から順番にその記念碑に描かれている人たちを紹介しますと、まずはフランシスコ吉(きち)という人、日本人の大名だったそうです。彼も殉教していくんですけども、彼のちょっとエピソードを『日本 26 聖人物語』という本の中に載っているのでも少しお話ししたいと思います。

『1月9日の早朝、受刑者たちは堺の町を連れ出され(大阪の堺です。)、長崎への遠い旅路についた。経路は瀬戸内海に沿っていたので、寒さは内陸ほど厳しくはなかったが、その代わり、霧と雨と泥んこ道とが旅をいちじろしく難儀なものにした。当日の昼に、一行は摂津の国尼ヶ崎という小さな集落に着いた。ここで小休止があった。受刑者たちは、役人と兵士たちが茶屋で食べたり飲んだりする間、道端の湿った草の中で待った。彼らは与えられた一個のにぎりめしを食べ、近くを流れている小川の水をやっとの思いで手ですくって飲んだ。出発のために、人々がふたたび駆り集められたとき、30がらみのひとりの男が息せき切ってあらわれ、ペドロ・バプティスタ神父の前にひざまづいた。そして一言も発することができずに、ただ泣くばかりだった。兵士たちが駆けつけて男を引きはなすと、役人のひとりが彼をどなりつけた。「お前は何者か。見たところキリシタンだな。ここにいるこの連中を見てみよ。彼らは太閤さまの禁令を破り、異国の邪教を広めたのだ。そして、そのために捕らえられ、数日のうちに処刑されることになっておる。即刻心を改め、異国の邪教と縁を切らなければ、お前にも同じ運命が待ち受けているぞ。さあ、さっさと消え失せろ!」。しかし男は首を横にふって、口ごもりながら言った。「いいえ、私はここにいる方々と共に処刑されたく存じます。私をこの中に加え、長崎に同行させて下さいませ。もしお許しなれば、一步もここを引きませぬ」。役人のひとりが彼を打ち、激怒して叫んだ。「何を申すか、この愚か者めが。それでも人の子か。人間誰しも、その生をさずけてくれたふた親を持つ。気の狂うた者でない限り、親に対する務めを心得ているもの。この日本には、それを心得ながら、わざわざ子の務めをないがしろにするような者はおらぬ。お前は、これらの異国人、人間の姿をした怪物共にたぶらかされ、日本人の魂をすっかり投げ捨ててしまったのだ。さあ、さっさと消え失せよ!」。

だが男は、怒りにも罵言にも動ずることなく、落ち着きはらって答えた。「これは異なことを仰せられます。人は両親を持ちますが、その両親もまた両親を持ち、さらにその両親も先祖代々の長い系列から由来します。そして、その系列は、すべての生命の根源にまします神にさかのぼります。あなたはそれを御存知ないとみえますな。神を知

ることに力を尽くす者のみが真に人間と呼ばれうるのです」。

いささかの恐れも見せずに男が鋭く言っていたので、役人はますます激昂した。「お前たち、この馬鹿者を引っ捕らえよ」と大声で命令を下された。兵士たちはどっと男に襲いかかり、後手に縛り上げた。しかし彼は、いかにも満足気な様子で言った。「これで私も神の恵みによって殉教者となりました。これ以上の喜びを私は知りません」。

そしてペドロ・バプティスタ神父の方を向いて言葉を続けた。「神父さま、私をお忘れでしょうか。私は京都の者で、大工の仕事をしております。八ヶ月前に洗礼を受けてカフスという名をいただき、堅信の際にはフランシスコと名付けられました。なおざりな信仰生活を送ってはおりましたが、それでも神は、殉教者になりたいという願いを私の心にお与えになったのです。それで、あなた方のあとを追ってまいりました」。

自分が洗礼を授けた信者の、この少しも犠牲を怖れぬ雄々しい信仰を見たとき、ペドロ・バプティスタ神父の喜びはどんなに大きかったことだろう。それは宣教師である彼の心に幸せな充足感を与え、宣教生活のすべての困難と労苦を忘れさせた。そしてさらに大きな犠牲を喜んで引き受けようという思いが彼の心を満たしたのだった。役人たちは、ただちに、この一部始終を大阪奉行と京都奉行石田光成に報告し、後者に対して、「罪人」の数が25人にふえたことを秀吉に伝えてくれるように依頼した。』と、こういうフランシスコ吉のエピソードがあります。

他にもその隣に立つのはコスメ竹屋という人で、刀の砥ぎ師(38歳)です。その横にはペテロ助四郎あるいはペドロ助四郎、この人は30歳の人です。その横にはミカエル小崎あるいはミゲル小崎、46歳の弓師です。その横にはディエゴ喜斎という人、64歳です。その横にはパウロ三木、33歳。この人は説教師として殉教の時も説教を止めずに槍で胸を刺されながらもずっと説教を続けて、最期息が絶えるまで説教を続けたという人です。その横にはパウロ茨木です。このパウロ茨木という人は54歳、桶屋さんです。そしてその横には五島のヨハネ草庵という人、19歳です。その横にはルドビコ茨木、12歳。この12歳が最年少です。先のパウロ茨木という人の子供です。ですから、親子で殉教したということです。10人目が長崎のアントニオという人で13歳です。そして11番目が先も出てきた神父ペドロ・バプティスタという人です。この人はスペイン人のフランシスコ会司祭です。48歳、54歳という説もあります。12番目がマルチノ・デ・ラ・アセンシオンという人で、この人もスペイン出身のフランシスコ会の司祭で30歳。宣教師ということです。33歳という説もあります。13番目にフェリペ・デ・ヘスス、24歳のメキシコ出身の修道士、宣教師です。14番目はゴンザロ・ガルシア、インド生まれのポルトガル人のフランシスコ会の修道士で40歳です。16歳の時に来日してこの時40歳だったということです。15番目がフランシスコ・ブランコという人。この人もスペインの出身で28歳です。16番目がフランシスコ・デ・サン・ミゲル、この人は53歳の修道士。17番目がマチアス、この人は料理人だったと言われていますが、実際には生まれた場所とか年齢も、日本人ではあるんですけども日本名も不明だという人です。18番目はレオ烏丸という人で48歳、日本人です。19番目がボナベントウラという人なんですが、この人も日本人です。この人もあまり多くは知られていない人ですが、幼い頃にお母さんと一緒に受洗したという人です。そして、その後お母さんが亡くなってしまって、その後継母に育てられるんですがその人が仏教徒だったので寺に彼は預けられて僧侶になったそうですが、20年後に改宗してまたキリシタンに戻ったという数奇な信仰歴を持った人です。年齢は不明です。20番目がトマス小崎という人で14歳です。ですから12歳、13歳、14歳という男の子たちがこの殉教者たちの中に含まれていたということです。お父さんもミゲル小崎という名前です。このトマス小崎、14歳のこの少年がお母さんに手紙を宛てているんですが、その手紙も残っているのでも読みたいと思います。

『聖トマス・小崎から母への手紙』

神の御助けにより、この手紙をしたためます。パードレ以下われわれ二十四名は、列の先頭を行く制札に書かれた判決文のように、長崎で磔刑を受けるため、ここまでまいりました。私のこと、またミゲル父上のこと、ご心配くださいませんように。パライズですぐお会いしましょう。お待ちしております。(“パライズ”というのはパラダイス、天国のことです。伝えられた信仰が本来カトリックの信仰ですから、死んだら“パライズ”に行くわけではないです。本当はそのまま“煉獄”に行くんです。そこには何の希望もないところです。場合によっては何十万年も自分の生前の罪をずっ

と償って行かなければいけない、そういうところであるはずなんですが、でも彼らはそのような信仰は持っていなかったということが分かります。死んだら“パライズ”に直行という信仰です。まさにプロテスタントの私たちと通ずるところがあります。そして、そこでお会いしましょう、お待ちしておりますと。)たとえパードレがいなくても、臨終には熱心に罪を痛悔し、イエズス・キリストの幾多の御恵みを感謝なされば、救われます。この世ははかないものですからパライズの全き幸福を失わぬよう、努力なさいますように。人からどんなに迷惑をかけられても耐え忍び、すべての人に大いなる愛徳を施されますように。私のふたりの弟マンシオとフェリペを、どうか異教徒の手に渡さぬよう、ご尽力下さい。私は母上のことをわれらの主にお願いいたしましょう。母上から私の知っている人々によろしく申し上げて下さい。罪を痛悔するのを忘れぬよう、再び重ねて申し上げます。なぜなら唯一の重大なことなのですから。アダムは神にそむき、罪を犯しましたが、痛悔とあがないによって救われました。

十二月二日 安芸の国 三原城にて。(「長崎への道」結城了悟著)

21 番目のヨアキム榊原という人、この人は武士で40歳です。22番目に医者フランシスコ、この人は46歳、京都の出身です。やはり医者で大友宗麟の侍医です。ホームドクターを務めていたような人です。23番目がトマス談義者という人で薬種商人だった人で36歳です。薬を買いに来る人たちにキリストの教えを説いていたという人です。24番目に絹屋のヨハネ、28歳の人です。絹屋さん。絹の布を織って商っていたという人です。25番目がガブリエルという人で日本人の伝道者で19歳です。この人もティーンエイジャーということです。26番目がパウロ鈴木という人で49歳、京都の病院の院長も務める説教師であったということです。

今挙げた殉教者の中で最年長は64歳です。最年少は12歳です。10代の人が5人も含まれています。極寒の1月に彼らは京都で捕らえられて市中引き回しの上、長崎まで約1,000キロの道のりを徒歩で縛られたまま1カ月間かけて連行されていくわけです。途中唾をかけられたり石を投げられたり、散々罵声を浴びせられて行ったわけです。そして長崎に着いてから取り調べの奉行が取り調べる時に、この最年少のルドビコ茨木少年を不憫に思って「キリストの教えを捨てれば武士としてとりたててあげよう。」と破格の申し出をしたわけです。するとルドビコ少年は「束の間の命と引き換えに永遠の命を交換することはできないことです。」と答えたと言います。また処刑直前に不憫に思った処刑人はルドビコ茨木君に対して、信仰を捨てて棄教して命乞いをするように勧めたそうです。でも彼は「僕の十字架はどこですか。」と処刑人に尋ねて、教えてもらおうとその十字架を抱きしめて口づけをして、そして「大丈夫だよ。僕らは今すぐパライズに(天国に)行けるんだから。」と仲間を逆に励ましたということです。先に少し触れたパウロ三木という人、33歳のこの人は十字架上で最後まで処刑されながらも説教を続けたという人なんです。豊臣秀吉に対しても語っているんです。「太閤様をはじめ処刑に関わったすべての人を赦します。切に願うのは彼とすべての日本人が1日も早くクリスチャンになることです。」そう語り、そう祈り、讃美歌を合唱しながら、処刑されて見せしめにされるはずが却って刑場に集まった多くの人に感銘と感動を与えてしまって、クリスチャン人口はむしろ激増してしまったという、最大推定300万人にまで増え広がったと言われております。当時の日本の人口は1,400万人ですから300万人といったらもの凄いな数です。外国の宣教師たちも報告をして、このままで行けば日本は確実にクリスチャンの国になるとすら言われていたわけです。その当時の日本ではキリスト教が、このクリスチャンたちが最大の宗派だったわけです。そんな時期があったんです。ただ残念なことに冒頭でお伝えした通り、伝えられた信仰はトリエント公会議で決められた、カトリックの聖書から逸脱した教えでしたから、それは長続きしなかったわけです。聖書を大事にはせず、言い伝えであったり、また行いというもの。実際に司祭という人間が仲介者としてどうしても必要なんです。彼らが居なくなったらカトリック信仰は衰退して消えてしまうわけです。でも、本当はそんな人たちは要らなかったはずなんです。聖書によれば仲介者はただ1人、イエス・キリストのみです。でもこの修道士たち、宣教師たちがどんどん追放されて、処刑されていって、そして彼らは聖書も大切にしませんでしたので、むしろ聖書よりもカトリックの伝承、言い伝え。そして司祭たちの権威、赦す権威が人間に与えられているわけです。神に求めることが出来ずに、修道士が居なければ罪の赦しすら得られないということで、必然的にそのような信仰は弱ま

って、そしていつの日か消えてなくなっていったわけです。でもその中でも主は純粋な日本人の信仰者たちの心を捉えて下さって、この 26 人のような人たちも与えて下さったわけです。ですからカトリックが皆全て聖書から逸脱した、それこそ偶像礼拝者のように、異端のように思われるところもあると思うんですけども、でも全てが皆そのような不純な信仰を持っていたわけではなかったということです。驚くべきことは、彼らは間違った信仰を伝えられながらも、もしかしたら宣教師の中にはルターのような聖書に立った健全な信仰を伝えてくれた人たちも勿論あったと思います。でも私たちと同じようには十分な教えを受けて来れなかったことは、これは否定出来ないところだと思います。少なくとも彼らは聖書を持つことが出来なかったわけです。自分で聖書を開いて確かめることも出来なかったのです。

なのにこのような熱い信仰を持つことが出来たのは何故でしょうか。私たちは彼ら以上に恵まれているはずなんです。それぞれが聖書を持つことが許されています。読むことも出来ます。そして教会もあります。かつてのキリシタンたちのような弾圧を受けません。求めれば求めるだけ霊的な祝福に与ることが出来ます。そのような機会はその辺にあるわけです。私たちはそれを選べるわけです。自由に出入り出来るわけです。もしそうであるならば私たちは、この長崎の 26 聖人以上の熱い信仰を持っているはずですし、持たなければならないということでもあります。でも今、彼らの死に様を聞いて私たちは恥ずかしく思ったかもしれませんし、「とてもじゃないけれども、私には無理。もしそんな目にあったら、私も転ぶ。」と。「イエス・キリストなんか知らないし、信じません。もうそんな信仰はやめます。パラインなんかどうだっていいです。生きていたい。死にたくありません。」なまぬるいクリスチャンならばその時にはきつとそうなると思います。棄教してしまうと思います。イエスはそれを忌み嫌っているのです。あなたにそうなって欲しくない。断罪する目的ではなくて、むしろヨハネの黙示録 3:16 だけ読むのではなくて、その前後を読んで頂きたいと思います。イエスが望んでいるのは、私たちを生ぬるいクリスチャンとして断罪することが目的ではなくて、むしろ熱いか冷たいか、どちらかであって欲しいし、あなたにはなまぬるくあっては欲しくはない。願いとするところは、あなたには熱いクリスチャンになって欲しいと。だから熱心になって悔い改めなさいと、イエスの言葉は続くわけです。「どうせお前なんかはなまぬるいクリスチャンだからろくな人生は送らない。そんな信仰をもって天国に行けると思うな。」そんな言葉は使われておりません。そんな態度はそこには見られません。イエスが私たちのことをなまぬるいと呼ばれる時、それはイエスの悲痛だと思って下さい。「あなたにはそんな者になって欲しくない。熱いクリスチャンとしてこの現世のものに心を奪われて、来世の本当の祝福を失って欲しくない。私はあなたと永遠にパラインで、天国で一緒にいたいから。だからなまぬるい者であって欲しくない。」と。それがイエス・キリストのハートだと思って頂きたいと思います。

榎本保郎という日本の“ちいろば先生”として知られている有名な牧師がいるんですが、勿論この人はもう天国にいらっしゃる方なんですけれども、こんなことを言っています。「この国の日本人が皆クリスチャンになることよりも、本物のクリスチャンがいることが大切だ。」と。彼が言ったことは、この国のクリスチャンたちが皆名ばかりのクリスチャンになればいいというのではなくて、たとえ少数でも本物のクリスチャン、たとえ 12 人でも本物のクリスチャンが、たとえ 26 人でも本物のクリスチャンがこの国には必要だと。私たちはこれから新会堂を建ててそこに引っ越そうとしておりますが、多分引っ越せば人も増えると思います。ここに来る前は飯綱町の本当に小さな小屋のような所に私たちは集まっていたわけです。ぎゅうぎゅう詰めでした。ここに移ったらもうここもぎゅうぎゅう詰めで、午前中も 10 人ぐらいいつも来ている人たちも風邪をこじらせたり、インフルエンザ等であれなかったにもかかわらず、もういっぱいだったわけです。そして、新しい会堂に行ったら同じことが起こると思います。でも私たちは単に人が増えることを手放しで喜ぶことは出来ません。イエス・キリストが求めているのは、なまぬるいクリスチャンが寄せ集まって、それが 100 人、200 人、300 人、1000 人、メガチャーチとなって、それで喜ぶお方ではないということです。「なまぬるいクリスチャンは吐き出す。」とおっしゃっているわけです。

ですから私たちが考えなくてはいけないこと、今晚自分に問わなければいけないことは、「私は今なまぬるいクリスチャンであるならば、どうしなければいけないのか。」ということです。どうしたらこのなまぬるい状態から脱することが出来るのか。自分がなまぬるいクリスチャンであることを否定する人は多分この中にはいないと思います。自分は熱

いクリスチャンだと胸を張って言える人は恐らく1人もいないと思います。だから安心して下さい。あなただけではありません。でもそれはそうとしまして、それで良いということではありませんから、そのまま、現状維持のままで、この現況のままでずっと続けて良いということではありませんので、「どうしたらこの状態から一步出ることが出来るのか。さらに熱くなれるのか。」イエス・キリストが快く思ってくれるようなクリスチャン、つまり熱いクリスチャンになるためにどうしたらいいのかということ、それを今晚考えて頂ければと思います。

黙示録の方に目を戻して頂きたいと思いますが 3 章 16 節を軸に皆さんと共にその前後を読みたいと思います。黙示録 3:15 にまずは目を留めて下さい。『¹⁵わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。¹⁶このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。¹⁷あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分のみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。¹⁸わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現さないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。¹⁹わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。²⁰見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。』15 節から 20 節までを今お読みしました。イエス・キリストが望んでおられることは、私たちが熱いか、冷たいか、そのどちらかです。それぞれが意味するところはいろんな解釈があります。熱いクリスチャンとはどういうものか。或いは冷たいクリスチャンとはどういうものか。それぞれいろんな注解書がいろんな解説をしております。それぞれここではそれが聖書の中に定義がありませんので、いろいろな認識があって構わないと思うのですが、一番重要なのはなまぬるいという状態、これだけはしっかり押さえて、これに該当しないように注意が必要だということです。そしてそのなまぬるい状態は明らかです。熱くもない、冷たくもない、どっちつかず、中途半端な状態。これが、イエス・キリストが忌み嫌うものだというのでありますから、そうならないようにということをここでイエス・キリストが私たちにも問うて、そしてその問題点を明らかにしながら、どうしたらその状態から脱することが出来るのか。ラオデキヤの教会に対してイエスはこの言葉を語っております。教会に対して語っています。教会に来ていないような人たちには言っていない。ですからなまぬるい人たちは、教会には来ない人たちだと思わないで欲しいと思います。教会に毎週来る人たち、教会のメンバーの人たち、その中になまぬるいクリスチャンが必ずいるということです。もし皆さんが、ここに居ない人たちがなまぬるいクリスチャンだと思っていたならば、大間違いです。むしろ彼らはそれ以前のクリスチャンかどうか疑わしいと。そして、なまぬるいクリスチャンもクリスチャンかどうか疑わしいと。それが真実であります。このラオデキヤのクリスチャンたちは、なまぬるい状態で満足していたということが言われています。ですからなまぬるいというのは、まず自己満足するという状態です。「何も変えなくていい。変わる必要はない。これで充分だ。現況のままでいい。」これが明らかになまぬるい人の特徴です。逆に熱い人は「このままではいけない。こんな状態ではとても満足出来ないし、もっと主を知りたい。もっと主に近づきたい。もっとこの主の熱い愛に私も応えたい。」主が私のためにどれほどのことをして下さったのか、そのことを思うだけで涙が溢れ、そしてその感謝を自分は一生かけて表して行きたい。自分の持てるすべてをもって、心を尽くし思いを尽くし知力を尽くして、自分の持てるすべてを出し尽くして。なまぬるい人たちは出し尽くしません。ちょこっと心を込めます。ちょこっと思いも、ちょこっと知力も。でも尽くすということには躊躇します。尽くしたら犠牲も払わなければいけません。痛みも伴いますし、尽くしたら自分の生活が落ちてしまうかもしれない。失うものがあるかもしれない。不自由が出てくるかもしれない。楽な生活が出来なくなる。それが嫌だから、尽くすということは致しません。それがなまぬるいという状態でもあります。ですからここでまず自己満足しているかどうか。そしてこのイエス・キリストの警告・忠告にも目を向けて頂きたいと思います。「私はあなたに忠告する。」と、なまぬるい人たちに対する忠告の言葉ですが、まずは「豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。」と。イエスに求めるということです。そして「裸の恥を現さないために着

る白い衣」もイエスに求めなさいと言われていました。そして、目が見えない状態。盲目になっていますから、「目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」これもイエスに求めなさいと。「わたしから」、「わたしから」、「わたしから」と。他へ行ってはいけなさいと。なまぬるい人たちは他に行くんです。金をカネをイエス以外のところに求めて行きます。ブランド物の服をイエス以外のところに求めていきます。自分を美しく立派に見せるもの。また目が見えるように。もっといろんなことが理解できるように、知識を先見の明を持つためにいろいろ勉強を積んで、イエス以外のところに求めて行きます。ですから「自分にはすべて揃っていて、別にイエス・キリストは必要ありません。」これはなまぬるい状態です。むしろイエスは「あなたは自分が何もかも不自由なく全てが揃っていると思い込んでいるかもしれない。でもそれは実際にはわたしの目には、あなたは豊かな者ではなくて貧しい者である。あなたは丸裸である。あなたは盲目の者である。」と。自己満足しているわけですから、それが現実だということです。私たちがなまぬるいということだけをただ断罪するだけではなくて、どうしたらこのなまぬるい状態から、この惨めな状態から脱することが出来るのか。そのことをイエスは忠告されております。こういった金とか衣服、また目薬というのは、これはラオデキヤの産物として名産だったわけです。これらのアイテムでこの町は有名だったということなので、ラオデキヤの人たちにとっては非常に分かりやすい身近なものだったので、彼らのレベルにおいて分かる言葉でイエスはコミュニケーションされております。ここにイエスの配慮、思いやりを感じる事が出来ます。なまぬるいクリスチャンたちに対してですら、彼らのレベルにまで下がって、彼らに分かるように教えて下さるお方です。そして愛する者をわたしは叱るのだと、懲らしめるんだ、ということが 19 節で言われています。なまぬるい人たちを吐き出すという嫌悪感をむき出しにしながらも、わたしは愛するものを叱ったり懲らしめたりすると。何か矛盾しているように聞こえるかもしれませんが、イエスはこのラオデキヤのなまぬるいと呼ばれてしまうような人たち、彼らが熱くなることを心から願っているわけです。主に立ち返ることを心から願っているわけです。諦めていないということです。皆さんのことも主は決して諦めていないということを知って頂きたいと思います。

そして、私たちがそれに応じるがどうかですけれども、イエス・キリストは 20 節で「わたしは、戸の外に立ってたたく。」教会の戸の外に立ってイエスはノックして下さっています。私たちの教会の頭であるのに、一番権威のある、一番力のある、一番偉い方なのに、教会の外に立って紳士的に優しくドアをノックしておられるわけです。むしろ逆になまぬるいクリスチャンたちをご自分の家から追い出してもおかしくないです。「ここはわたしの家だから、お前たちのようななまぬるい忌み嫌うべき者たちは出て行け。」と、追放されてもおかしくありません。路頭に私たちは投げ出されて、そこで迷ってもおかしくないわけですが、イエスの方から「私はここにいられないから。もう吐き出すような、もう気分がとても優れない。気持ち悪い。」と言って出て行かれて、そしてそのまま帰って来ないのではなくて、「わたしはあなたたちと一緒にご飯が食べたいんだ。交わりがしたいんだ。」と。でも吐き出すようななまぬるい状態では、とても一緒にご飯は食べられない。熱いラーメンじゃないと。冷やし中華じゃないと。とてもなまぬるい伸びきったラーメンは食べられません。それは冗談としても、イエス・キリストはなまぬるい者を本当に忌み嫌われるわけです。ですから私たちはイエスが好んで求めて下さるような者にならなくてはなりません。そのためにイエスが忠告して下さっていますし、チャンスを与えて下さっているということです。戸の外に立って今日もイエスはあなたの心の扉を叩いておられます。蹴破って来ません。ぶち破って来ません。強引ではありません。ノックして下さっているんです。そのノックは今皆さんの心の中に響いているのでしょうか。「わたしはあなたの心の中に入って、そしてあなたと一緒に親しい会食を持ちたい。」と、そのことがこの教会にも言えることであります。外は寒いですがけれども、イエスは戸の外に立って叩いておられます。私たちはぬくぬくとなまぬるい状態で、とりあえず日曜日教会に礼拝に出席して、プログラムをただ卒なくこなして、これで時間が来たらさよならと。「今日も私はクリスチャンとして務めを果たした。日曜日は終わった。さあ月曜日から私の時間だ。」と。イエス・キリストなど思い起こすこともなく商売に夢中で、ビジネスに夢中で、金儲けに目がくらんで、肉欲に駆られて、欲望の赴くままに 1 週間過ごして、そしてまた日曜日が来たら「さあ、今日は礼拝の日だ。朝から教会に行きましょう。」それがあなたの週間スケジュールならば、是非イエスはそのような生活を全く喜ばれていないということを知って頂きたいと思います。熱いか、冷たいか。100か、0かです。フィフティ・

フィフティなどないのです。半分クリスチャン、半分ノンクリスチャン。この世に片足を突っ込むようなそういう中途半端な生半可な状態をイエス・キリストは全然喜んでいないということです。私たちはそれを喜んでいますが、それが楽しいと感じているわけでは、それが無難だと思っています。あんまり熱くなり過ぎると、頭がおかしいと思われるかもしれない。この世の人たちとうまく関われなくなってしまうかもしれない。嫌われるかもしれない。見下げられるかもしれない。人間関係を失うかもしれないし、仕事上にも支障があるかもしれない。ここはノンクリスチャンのふりをしよう。でも教会に行ったら、いつものように笑顔で2月5日だしニコニコしながら。でもイエスの顔はどうでしょうか。なまぬるいあなたを見てニコニコされているかどうか、もう一度イエスの顔を見上げて欲しいと思います。

でも、そんななまぬるいあなたでもイエスのこの忠告の言葉をしっかり聞いて「私はこの状態から脱したいです。もうなまぬるい状態はやめたいです。」イエスから買って欲しいと思います。勿論このような救いとか、或いは祝福というものをお金で買うことは出来ません。でも、買うということは、コストがかかるということです。犠牲を払って。黙っていて何もしないで座ったままで何か得られると思わないで下さい。それが価値のあるものならばこそ、コストがかかるわけです。犠牲が伴うということです。それがどれほどの価値のあるものか、追い求めて欲しいと思います。そのために時間やお金や労力を惜しまないで欲しいと思います。イエスに求めて下さい。イエスは必ずあなたに与えて下さいます。そのことを自分のこととして今晚受け止めて実践していくならば、あなたのなまぬるさはここで払拭されて、イエス・キリストがあなたを快く思ってあなたと共に一緒にご飯を食べるような親しい交わりの中にあなたを迎え入れて下さいます。私たちは今イエスの声を聞いております。戸の外に立って叩くイエスのノックの音もそうですが、「わたしの声を聞いて戸をあけるなら」と言われていますから、声も出しているということです。黙ってノックしているのではないのです。サタンもあなたの扉をノックしますが、イエスはあなたの名前を呼んでノックして下さい。サタンはあなたの名前を知っていますが、あなたの罪を並べたててノックします。「お前はこんなことをした。あんなことをやった。お前はこんな者だ。それでもクリスチャンか。」と。イエスはそのように私たちを責め立てたり、或いは借金取りのようにドンドン扉を乱暴に叩くようなお方ではありません。私たちの名前を呼んで「あなたに開けてもらいたい。わたしがあなたと一緒に食事をするためには、あなたは何をしなければいけないのか、私が忠告してあるはずだから。」そのような紳士的な態度で私たちの心の扉を、私たちの教会の扉を今晚もイエスは叩いて下さっております。

新しい会堂に移ってもイエスがその中に居なければ、何の意味も価値もありません。立派な会堂を建ててもイエスが外に閉め出されていたら、そこはもぬけの殻と言って良いと思います。でもどんなに安普請な掘っ建て小屋のような建物だったとしても、その中にイエス・キリストが居られれば、そこはもうパレスです。王の王、主の主が居られる王宮であります。そのような教会こそ価値があるわけです。ステンドグラスがないような教会は教会とは言えないとか、「鐘も付いてないのか、塔もないのか。なんだあの建物は。」とクレームも付いてくるかもしれませんが、一番重要なのは、イエスがその中に居るかどうかがです。イエスが心地よくずっと1日私たちと過ごせる教会かどうか。逆に私たちは、自分たちが如何に心地よく快適に教会で過ごせるか。椅子が硬すぎるとか、空気が汚いとか、寒すぎるとか、暑すぎるとか、汚いとか、自分の好みの装飾品がないとか。そんなことばかりを私たちは思って教会に集っているかもしれませんが、そのような問いは何の意味も果たしません。イエスがそこに居なければ何の意味も果たさないということです。イエス・キリストが新しい会堂にも喜んで集って下さるように。そのような会堂でなければ今すぐ私たちはこの計画を取りやめなければいけない。お金はかかったかもしれないけれども、建てても意味がないということです。そのぐらいのことを思って頂きたいと思います。イエスが吐き出すような教会だったら、会堂だったら意味がないわけですから、そこに集うことも意味のないことになります。そのような指針をこの新しい年に、11月の時から皆さんにはお伝えしてありますけれども、改めてなまぬるいクリスチャンという言葉を使って前回と同じように、前回もなまぬるいという言葉は使いませんが、現状維持のままで満足しないようにということは繰り返し伝えたはずであります。それに満足する人たちが、なまぬるい人たちであるということなので、変化も戸惑うかもしれませんが、新しいことになかなか慣れないかもしれませんが。でも現状維持で、現況のままで、自分の居心地の良いところをただその延長で、ずっとその方が慣れているし、その方が安心だと思いついて入っている人があるならば、それはイエスからしたら忌み

嫌うべきことだということですから、やめなければいけません。改めてなまぬるいままでは新しい会堂に移るまいと今ここで決心をして頂きたいと思います。勿論それは猶予期間が3月31日までであるということの意味しているわけではありません。もう今晚からそう思って頂いて、来週にはなまぬるいクリスチャンとして来るのではなくて、熱いクリスチャンとして少なくとも今日よりも熱いクリスチャンとして成熟を目指して是非集って頂きたい。それが日を追うごとに、週を追うごとに、月を追うごとに、年を追うごとに、ますます熱くなり、ますます主に喜ばれるクリスチャンへと成長していく。それが、イエス・キリストが喜ばれる教会の姿であり、個々人の姿であるということです。

今日はもうこれで終わりたいと思いますが、皆さんのお手元にある週報、なまぬるいクリスチャンの定義、これは時折見返して頂きたいと思います。またフランシス・チャンという人の書いた『クレイジー・ラブ』という本は今でも買えますので、そのうち絶版になってしまうと思いますが、ただそこに書かれている内容すべてに私は賛同しているわけではありません。フランシス・チャンの言葉の中には「なまぬるいクリスチャンは天国には行かない。」とそこまで激しく言っていますので、その辺はいろんな理解があるということも彼は触れておりますけれども、でもその可能性も否定できません。なまぬるいクリスチャンの中には天国に行かない人たちも確かにあると思います。でも全員が全員そうだとは私は思っておりません。ですから、もし興味のある方がいらっしゃったらその本も推薦できる本なので、MGFのメンバーの必読書というのも会堂が完成するまでに読み切るようにと週報にはずっと書いてきています。にもかかわらず皆さんは別段心に留めることもなく「ああ、そうですか。一応私もメンバーですけども、まあそれは熱心な人たちが読むだけであって、私は他にもやることもあるし、他に読むものもあるし、忙しいんです。」と、真に受けない人もあると思います。でも熱いクリスチャンならば是非、勿論聖書が第一です。今年は最低1回は66巻を通読して頂きたいと思いますし、2回でも3回でも出来るならば、熱ければそのくらいは軽く出来ると思います。そしてMGFのメンバーの必読書、それもあなたが熱いクリスチャンならばきっと読み切ることが出来ると思います。たとえ3月31日までにすべて読みきることが出来なくても、そのうちに追いついて頂いて、それ以降にまた新しいメンバーの必読書を発表しますのでキャッチアップして頂きたいと思います。もう諦めた、もうついて行けないと思わないで頂いて、時間がかかっても読もうと決心して下さい。そしてまた主が皆さんに与えて下さっているありとあらゆる祝福の手だてをフル活用して頂きたいと思います。いろんな人の祈りも助けも受けることが出来ます。自分ひとりで孤軍奮闘する必要もありません。お互いに励まし合いながら助け合いながら一緒に御言葉を学ぶ。一緒に祈り合う。愛し合って、そして成熟を一緒に目指して行ける。それが教会という共同体でありますから、自分1人に全て押し付けられてプレッシャーだと思わないで欲しいと思います。私たちは怠慢な者です。ついなまぬるい方を選びがちの傾向を持っていますからお互いに刺激しあって、ちゃんと聖書を読んでいるのか、お祈りしているか、一緒に分かち合って励まし合って前に進んで頂きたいと思います。ですから本物のクリスチャン、それがMGFに集っているとそのようにイエス・キリストも認めて下さって、そしてノンクリスチャンにもそのように見てもらえるようなそういう熱い教会に成長していくことを皆さんも共通のゴールとして頂いて、何となくただ教会に集まっているだけの、何かクリスチャンの人が集まっているようだけれども、他の宗教とそんなに変わらない。善光寺に参拝者が行くように、そこに教会があるからただ行っているだけだと、そこに建物があるからただ行っているだけだというふうにならないで、そこには熱い本物のクリスチャンたちが集まっているんだと、長野中で噂になるように。狂信者と呼ばれたとしても、是非恐れずにイエス・キリストが私たちの主であることが誰の目にも明らかになるように。この主に私たちがどれほど良くして頂いているのか、どれほど私たちが主を愛しているのかということが誰の目にも分かるように。教会に人をただ呼び集めるのではなくて、教会を通してキリストのからだがどんなに魅力的で、どんなに美しく、そしてどんなに力強いのか。善光寺の目の前で私たちが証しできる素晴らしい機会が主から与えられていると思って欲しいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。